



Title	カンボジア人日本語学習者における授受補助動詞の「非用」に現れる恩恵意識について
Author(s)	ウン, テワンダ
Citation	日本語・日本文化研究. 2024, 34, p. 84-98
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/101317
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

カンボジア人日本語学習者における 授受補助動詞の「非用」に現れる恩恵意識について

ウン テワンダ

1 はじめに

授受表現は日本語学習者にとって習得が困難で、誤用の多い文法項目であるが、先行研究において、最も目立つ誤用は授受補助動詞の語彙形式の選択における混同ではなく、「非用」と指摘されることがある（cf. 中崎 2002, 李 2021 など）。ここで言う「非用」とは、授受補助動詞の無使用によって不自然となる誤用のことである。

- (1) a. 道が分からなくて困っていると、友達が案内してくれた。
b. ? 道が分からなくて困っていると、友達が案内した。（「非用」）
- (2) a. 妹がけがをしたので、薬を塗ってあげた。
b. ? 妹がけがをしたので、薬を塗った。（「非用」）

堀口（1983）や中崎（2002）によると、日本語学習者の課題作文の誤用では、授受補助動詞を使っていないために適切さを欠く事例が最も多い。孫（2013）、梁（2019ab）、李（2021）も、中国人日本語学習者が授受補助動詞を使用すべきところで使用しない場合が目立つと指摘している。また、太田（2020）によると、日本語学習者が恩恵的な状況とかけ離れていると捉える文脈では授受補助動詞の運用が難しいことが観察されたとし、李（2021）も中国人日本語学習者において授受表現の恩恵の理解が不十分であると述べている。

本稿の目的は、カンボジア人日本語学習者の「非用」の背景にある恩恵意識を明らかにし、カンボジアの日本語教育に貢献することである。なかでも、学習者がどのような文脈で恩恵や感謝を感じにくく、授受補助動詞の使用・無使用との間どのような関連性があるのかを探りながら、「非用」の要因を明らかにすることが重要である。本稿では、筆者が行った調査を用いてカンボジア人日本語学習者における「非用」について考察を行う。

2 先行研究における「非用」の定義

中崎（2002）は、授受（補助）動詞を使用し事物の受益や事態・事象に対する恩恵性が表現されなければ不自然であると日本語母語話者が判断する場面において、日本語学習者が補助動詞を脱落させているケースを「非用」として扱っている。そして、王（2000）、張（2017）、周（2019）、李（2021）等、それぞれに共通しているのは、基準は不明であるが、学習者が授受補助動詞を使用すべきところに使用しないことを「非用」としていることである。

一方、堀口（1983）は、日本語学習者において、授受動詞の使用法に誤りがあるのではなく、文法的に誤りではないが、授受動詞を使っていないために表現に適切さを欠き、授受動詞を使うべきところ、あるいは使ったほうが自然であるところに使えないことを「授受動詞

の無使用」としている。孫（2013）はこれを「不適切な無使用」と名付けた。

先行研究の中には、「非用」が起こる原因についてまったく言及していないものもある。さらに、「非用」が起こる原因は恩恵性のみではないため、恩恵性についての言及しかない場合は、要因の考察が不十分だと言える。また、全ての先行研究が、中崎（2002）のように具体的な調査に基づいて「非用」の判断基準を明示しているわけではないという問題点もある。そこで本稿では、日本語母語話者の調査のもとに数値化したものを基準とし、より客観的な「非用」の判断基準を行う。本稿における「非用」も、単に授受補助動詞を用いないことではなく、それが誤用となることを含めた概念である。

3 研究方法

3.1 調査の流れ

授受補助動詞を用いないと「非用」になるかどうかを判断するために、まず日本語母語話者の協力を得て、184 文（46 問×授受補助動詞の無使用、「てくれる」、「てもらう」、「てあげる」の 4 つの選択肢）について適切さを判断してもらった。そして、母語話者への調査結果をもとに、「非用」の判断基準を決定し、母語話者用の調査問題の中から「非用」に関する問題を選び出し、学習者用の本調査を行うⁱ。その後、調査の結果をもとにフォローアップインタビューⁱⁱを行った上で、学習者の「非用」に現れる恩恵意識について明らかにする。

3.2 日本語母語話者に対する調査

調査に協力してくれた日本語母語話者の情報は以下のとおりである。

【対象者の情報】

人数：43 名（女性 39 名、男性 4 名）。

年齢：20 代（7 名）、30 代（2 名）、40 代（3 名）、50 代（15 名）、60 代以上（16 名）。

出身地：京都府（4 名）、兵庫県（5 名）、千葉県（2 名）、大阪府（7 名）、岡山県（2 名）、徳島県（10 名）、新潟県（2 名）、東京都（1 名）、滋賀県（1 名）、神奈川県（3 名）、福井県（1 名）、長野県（3 名）、静岡県（1 名）、高知県（1 名）。

母語話者の調査問題は、4 つの選択肢から適切だと考える答えを一つ以上選ぶ選択問題である。46 問（46 問×4 つの選択肢＝184 文）あるため、5 つのセッションに分けて調査協力者の心理的な負担を減らし、集中力が持続できるようにした。また、4 つの選択肢は、常に、a 授受補助動詞を含まない述語、b「てくれる」を含む述語、c「てもらう」を含む述語、d「てあげる」を含む述語、の順に提示した。これは、選択肢をアランダムにしないことで調査協力者の認識面での負担を減らすためである。また、調査協力者に「非用」の調査であることを悟られないように、授受補助動詞を使用しない方が適切であると思われるダミーの問題が 4 問（4 問×4 つの選択肢＝16 文）入っている。さらに、自分自身の考えで判断してもらうために、調査協力者ごとに異なる順序で問題を提示し、他の協力者と意見交換がで

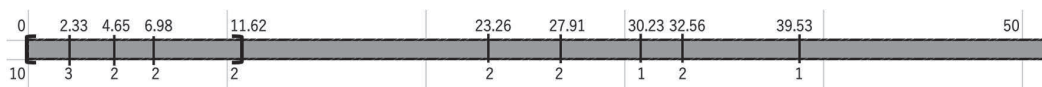
きないようにした。調査には Google Forms を使い、web 上で行った。

さまざまな環境における授受補助動詞の（無）使用を調査するために、単文、複文、主語や目的語を省略した文、状況説明がない文を混ぜた。また、複文の従属節としては、原因節、条件節、逆接節、連体節、継起節ⁱⁱⁱの5種類を使った。選択肢の述語の出現位置については、単文の文末が11問、複文の文末が12問、複文の従属節末が19問である。

3.3 「非用」の判断基準

日本語母語話者への調査において授受補助動詞を伴う述語を適切なものとして選択した割合が高く、授受補助動詞がない述語を選択した割合が低い問題について、学習者が授受補助動詞がない述語を選択した場合を「非用」と判断する。今回の調査における「非用」の判断基準となる具体的な割合は、母語話者の80%以上（＝35名以上）が授受補助動詞を使用した述語を選択し、かつ、授受補助動詞無使用の述語を選択した割合が11.62%以下（＝5名以下）のものとした。この設定の根拠は、次の通りである。まず、学習者用の問題の候補とするに適した38問^{iv}の全てにおいて、適切な授受補助動詞が母語話者によって選ばれた割合が80%以上であった。図1は、母語話者が授受補助動詞無使用を適切だとした割合が50%以下のものを列挙したものである。グラフ上部の数値は割合（%）で、下部の数値は対応する問題の数である。図1が示すように、母語話者が授受補助動詞無使用の述語を選択した割合が低いものは11.62%以下に集中して分布しており、11.62%とその次に割合が高い23.26%の間に大きな差があることから、11.62%以下を「非用」の判断基準とした。

図1：母語話者が授受補助動詞無使用の述語を選択した割合



学習者に対する調査に使用する問題文の選定に際しては、それぞれの選択肢を適切だと判断した母語話者の割合にもとづき、問題文を3種類に分けて行った。

問題タイプIは、学習者が選択肢a（授受補助動詞を含まない述語）を「最も適切」または「適切」であると選んだ場合に「非用」となるものである。以下、括弧内の数値は母語話者がそれぞれの選択肢を選んだ割合を示す（複数回答可）。

問題タイプI：

あなた：私は小さい時に、お母さんが（ ）ぬいぐるみをずっと大事にしている。

a プレゼントした (2.33%)

b プレゼントしてくれた (95.35%)

c プレゼントしてもらった (2.33%)

d プレゼントしてあげた (2.33%)

このタイプIでは、母語話者が正用の授受補助動詞を含む述語（b プレゼントしてくれた）を選択した割合が80%以上で、授受補助動詞の無使用を選択した割合が11.62%以下であるため、これを「非用」の調査として学習者用の問題とする。

日本語能力試験(JLPT): N2取得1名、N3取得7名、N4取得4名、N5取得6名、
非取得32名

【3年生】

性別: 男性23名、女性27名

年齢: 10代2名、20代45名、30代2名、答えたくない1名

クラス: 午前クラス24名、午後クラス16名、夜間クラス10名

JLPT: N2取得1名、N3取得12名、N4取得10名、非取得27名

【4年生】

性別: 男性15名、女性34名、答えたくない1名

年齢: 20代48名、30代2名

クラス: 午後クラス12名、夜間クラス38名

JLPT: N2取得9名、N3取得16名、N4取得6名、N5取得1名、非取得18名

A 大学日本語学科は4年制で日本語を学習する。1年生では基礎的な日本語の他に一般教養の科目があるため、週に6時間のみ日本語を学習する。一学期は15週間で、1年に2学期あるため、年間の日本語学習時間は180時間である。2年生から4年生にかけては、週に15時間、年間で450時間、日本語を学ぶ。2年生と3年生では専門基礎科目として日本語を学ぶ。初級レベルの教科書は2年生前期でほぼ終わり、2年生後期以降は中級レベルの教科書が使用される。そして、4年生で日本語教育専攻とビジネスのための日本語専攻に分かれ、専攻科目(共通科目と各専攻の科目)を学ぶ。本調査では、2年生から4年生を対象とし、調査時点で、2年生は前期の第13週目で、3年生と4年生は前期を終えたところであった。2年生は初級レベルで出される授受表現の学習は終わっている。

母語話者用の調査問題の中から、前節で説明した問題タイプIと問題タイプIIIに判定された25問を用いて、カンボジア人学習者用の本調査項目を作成した。日本語母語話者への調査と同様に、同じパターンの問題であっても、5つのセッションに分けて、被験者の心理的な負担を減らし、集中力が持続できるようにした。また、被験者ごとに異なる順序で問題を提示することで、他の被験者と意見交換せず被験者自身の実力で解答を行えるようにした。

調査方法としては、日本語文の空欄に選択肢a, b, c, dを当てはめ、それぞれの文の適切さについて学習者に判断してもらう。適切さの判断には3つの選択肢があり、それは「◎最も適切」、「○適切」、「×不適切」である。母語話者調査と同様に、全問題において、aは授受補助動詞を含まない述語(授受補助動詞の無使用)、bは授受補助動詞の「てくれる」を含む述語、cは授受補助動詞の「てもらう」を含む述語、dは授受補助動詞の「てあげる」を含む述語の順に選択肢を列挙する。選択肢の順を固定したのは、アランダムにしないことで、被験者の認識面での負担を減らすためである。合計すると、25問×4つの選択肢=100文を評価してもらうことになる。このテストには、「てくれる」、「てもらう」、「てあげる」の区別も含まれるため、学習者は、(省略された)主語や目的語、文中にある格助詞等も頼

りにして授受補助動詞の適否を判断することも求められている。以下は、学習者用のアンケートにおける問題の一例である。ただし、実際には指示や場面説明など（下線部分）はカンボジア語で書かれている。また、漢字の読みを仮名で示し、難しい語彙にはカンボジア語の訳を付した。

以下のそれぞれの言葉を括弧の中に入れて、文の適切さについて判断して下さい。

問題：【あなたは病気になりました。木村さんはあなたを病院へ連れて行きました。】

あなた：木村さんは、忙しいのに、病院に（ ）。

	◎最も適切	○適切	×不適切
a 送った	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
b 送ってくれた	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
c 送ってもらった	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
d 送ってあげた	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

4 学年による「非用」の結果分析

学習者を対象とした本調査を行ったのち、フォローアップインタビューを実施した。当該インタビューについては次章で詳述するが、25 問のうち 7 問が学習者にとって恩恵や感謝を感じにくいと分かった。母語話者に対する調査では、その 7 問のうち 3 問は授受補助動詞の無使用も適切だと判断されている。（当該の 7 問については 5 章を参照。）

本章では、学習者が恩恵を感じにくい問題について、学習者の学年によって「非用」の割合等がどのように異なるかを分析するために、問題の 7 問から授受補助動詞の無使用も適切だと判断された 3 問を除いた 4 つの問題の選択肢 a に関して *t* 検定を行い、日本語学習歴と授受表現の習得度に相関があるかどうかを検証した。採点方法として、選択肢 a を「×不適切」とした場合は 1 点をつけ、「◎最も適切」あるいは「○適切」を選択した場合、つまり、「非用」（＝誤用）となってしまう場合は 0 点をつける。

表 1：恩恵を感じにくい問題における選択肢 a の平均点と正答率（満点：4 点）

	人数	平均点	最高得点	最低得点
2 年生	50 名	1.34 点(33.5%)	4 点	0 点
3 年生	50 名	0.92 点(23.0%)	3 点	0 点
4 年生	50 名	0.86 点(21.5%)	4 点	0 点

表 1 における平均点欄の括弧中の割合は平均正答率である。どの学年でも平均正答率が低く、授受補助動詞の無使用を適切だと判断してしまった「非用」の選択の割合が高いことが分かる。2 年生の平均正答率は 33.5%、3 年生は 23%、4 年生は 21.5%である。全学年での平均正答率は、26%になり、学習者にとって恩恵や感謝を感じにくい文脈でも、授受補助動詞を使用すべき場合があるのを十分に理解できていないことが分かった。

次に、各学年の平均正答率の間に有意な差があるかどうかを調べるために t 検定を行った。比較するデータは全て対応のないデータのため、まず分散が等しいかどうかを確認するために F 検定の 2 標本を使った分散の検定を行った。2 年生と 3 年生の間の F 検定を行った結果、有意確率（両側） $=0.11692 > 0.05$ となったため、分散の差に意味があるとは言い切れない。それで、分散は等しいと仮定して、2 標本による t 検定を行った結果、有意差が見られた。有意確率（両側） $=0.03723 < 0.05$ となったため、授受補助動詞の「非用」に対する理解は 2 年生と 3 年生の学年で異なると言える。

表 2：2 年生と 3 年生における恩恵を感じにくい問題の「非用」に関する t 検定

t検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	2 年生	3 年生
平均	1.34	0.92
分散	1.208571429	0.768979592
観測数	50	50
プールされた分散	0.98877551	
仮説平均との差異	0	
自由度	98	
t	2.111885868	
P(T<=t) 片側	0.018619629	
t 境界値 片側	1.660551217	
P(T<=t) 両側	0.037239258	
t 境界値 両側	1.984467455	

同様に、3 年生と 4 年生の間の F 検定を行った結果、有意確率（両側） $=0.16866 > 0.05$ となったため、分散の差に意味があるとは言い切れない。それで、等分散を仮定した 2 標本による t 検定を行った結果、有意差が見られなかった。有意確率（両側） $=0.75964 > 0.05$ であり、授受補助動詞の「非用」に対する理解は 3 年生と 4 年生で差があるとは言い切れない。

上記の t 検定の結果から、学習者が 2 年生から 3 年生に上がった後、「非用」に関する理解が下がり、次の学年（4 年生）になっても、「非用」に関する理解は 3 年生時と変わらないと言える。A 大学日本語学科のカリキュラムでは、1 年生から 3 年生にかけては専門基礎科目として、4 年生では専攻科目として日本語を学習する。つまり、3 年生と 4 年生の間で平均正答率に差がないのは、授受表現が教授されるのは日本語の文法科目がある 3 年生までで、4 年生では文法科目がないため、すでに定着した授受表現に関わる知識に変化がないからだと考えられる。一方、2 年生から 3 年生になる時、なぜ「非用」に関する理解が上達せず、逆に下がっていくのかの要因については詳細な調査が必要であるが、授受表現の学習過程において恩恵性を強く教えられることが一つの要因である可能性がある。それを解明するためには教材分析が不可欠であるが、これについては今後の課題としたい。

以下では、日本語母語話者と異なり、授受補助動詞の無使用のほうをよしと捉える学習者の意識の傾向について考察する。

表 3 : カンボジア人日本語学習者の回答状況 (50 名／一学年)

問題 の 番 号	母語話者 の選択	カンボジア人日本語学習者												
		授受補助動詞の使用				授受補助動詞無使用								
		不適切				最も適切				適切				合計
		2年生	3年生	4年生	合計	2年生	3年生	4年生	小計	2年生	3年生	4年生	小計	
5	「てあげる」	22	21	25	68	7	11	15	33	7	6	6	19	52
8	「てあげる」	34	27	32	93	16	16	15	47	9	10	12	31	78
9	「てくれる」	9	13	3	25	4	4	0	8	1	7	3	11	19
10	「てあげる」	26	16	21	63	8	9	9	26	5	5	8	18	44
12	「てあげる」	12	10	18	40	4	4	8	16	4	4	10	18	34
13	「てくれる」	16	21	13	50	7	7	4	18	4	12	8	24	42
18	「てもらう」	28	39	25	92	11	13	10	34	15	19	14	48	82

表 3 は、日本語母語話者が授受補助動詞の使用が適切であるとした問題文についてカンボジア人学習者が授受補助動詞の使用を不適切と判断した人数と、授受補助動詞の無使用を最も適切または適切と判断した人数を示すものである。日本人母語話者と逆の判断をする学習者が多いのは問題 8 と 18 である。学習者 150 名のうち、問題 8 は 93 名 (62%)、問題 18 は 92 名 (61.33%) が授受補助動詞の使用を不適切としている。つまり、この二つの問題については、母語話者にとって適切とされる授受補助動詞の使用を不適切と判断している学習者が全体の約 3 分の 2 に上る。それに連動して、授受補助動詞の無使用を（最も）適切と考える学習者の数も最も多く、問題 18 では 82 名 (54.66%)、問題 8 では 78 名 (52%) がそのように答えている。フォローアップインタビューでは、授受補助動詞の使用を嫌い、無使用を好む要因として、問題 8 については恩着せがましい表現を回避するため、問題 18 については場面状況に合わない恩恵表現を回避するためと考える傾向が見られた。

その次に母語話者との判断の差が大きいのは問題 5、10、13 である。学習者 150 名のうち、問題 5 は 68 名 (45.33%)、問題 10 は 63 名 (42%)、問題 13 は 50 名 (33.33%) が授受補助動詞の使用を不適切としている。つまり、学習者の約 3 分の 1 が母語話者にとって適切とされる授受補助動詞の使用を不適切と判断している。それに連動して、授受補助動詞の無使用を（最も）適切と考える学習者の数は、問題 5 で 52 名 (34.66%)、問題 10 で 44 名 (29.33%)、問題 13 で 42 名 (28%) であった。フォローアップインタビューでは、補助動詞の使用を不適切と考える理由として、授受表現は恩恵性のみを表すという誤解（問題 13）や恩着せがましい表現を回避するためという意見（問題 5 と 10）が見られた。

このように、調査結果のデータから、学習者が恩恵・感謝を感じにくい文に対しては、授受補助動詞の使用が不適切で無使用が適切だと判断する傾向があることが分かった。これが「非用」を生み出す要因になっていると考えられるが、具体的に学習者はどのような場合に恩恵がある、または、ないと考えているのだろうか。次章でこれについて考察する。

5 学習者に見られる恩恵の価値観

本調査の目的は授受補助動詞の無使用が不適切な場合があることをカンボジア人日本語学習者がどの程度理解しているかを測定することであるが、フォローアップインタビューの際にその調査目的を察知できたかどうかを確認したところ、はっきりとは分らないが、授受表現に関するもので、特に「てくれる」「てもらう」「てあげる」の使い方を問うものだと考えた被験者が多かった。そして、「非用」となり得る問題文（19問）において、多くの被験者がいずれかの授受補助動詞を最も適切と判断すると同時に、授受補助動詞の無使用も適切と判断した。具体的には、授受補助動詞の無使用を最も適切あるいは適切と回答した平均値は、2年生で59.27%、3年生で66.85%、4年生で68.53%であった。過半数の被験者が授受補助動詞の無使用も適切であるという誤った認識を持っていることが明らかとなった。本調査にあたり、筆者自身の日本語教授経験から、被験者の6割程度は授受補助動詞の無使用が不適切になる場合があることを理解していると予想していたが、実際は3〜4割程度に留まったこと、そして、日本語学習歴が長いほど「非用」になる授受補助動詞の無使用を適切だと判断してしまう割合が高いことが興味深い事実として浮かび上がった。フォローアップインタビューでは、多くの被験者が、日本語の授受補助動詞は恩恵を表し、話者に利益をもたらす時に使用され、被害を表す時は受け身が使用されると習ったと述べている。そのため、カンボジア人日本語学習者は、恩恵を表すような状況ではなく、客観的に物事を描写したい時は、授受補助動詞を使用する必要がないと認識していると考えられる。

本章では、調査結果およびフォローアップインタビューをもとに、学習者が恩恵や感謝をどのように捉えているかを詳しく考察する。

5.1 恩恵性の程度に関する誤認

次の問題9は、母語話者への調査の結果では、授受補助動詞「てくれる」が現れる必要がある連体節の文である。しかし、被験者の多くが選択肢aも適切であると考えている。ここには、「教える」という動詞の捉え方が学習者と母語話者の間で異なり、それが恩恵性の認識の相違につながっていることが背景にある。つまり、学習者は「恩恵」の関わりに対して母語話者と異なる価値観を持っているため、無使用を選択し、「非用」となっている。

問題9:【昨日、兄から安くておいしいレストランの話を聞きました。忘れてしまったので、もう一度確認します。】

あなた:きのう、お兄さんが安くておいしいと()レストランはどこにあるんだっけ。

〈a 教えた／b 教えてくれた／c 教えてもらった／d 教えてあげた〉

母語話者の回答率: a 0%, b 93.02%, c 9.30%, d 2.33%

学習者の回答率: a 76%, b 83.33%, c 56.66%, d 24.66%

※回答率は「(最も) 適切」と判断した回答者数の割合である。

この連体節の問題文に関して、授受補助動詞の無使用が最も適切あるいは適切で、授受補助動詞の「てくれる」が不適切だと選択した被験者 19 名にフォローアップインタビューを行った。それらの被験者の考えを総括すると、「教える」という動詞はすでに恩恵を含意するため、恩恵の意味を表す「くれる」を重ねて使わなくてもいいとのことであった。ただし、もし話者にとって大きな恩恵が与えられる状況であれば、「教えてくれる」の方が適切だという意見があった。この文のように、いいレストラン程度の話題では、「教えた」のみで十分だというのがカンボジア人学習者に見られる考えである。そこで、「教えてくれた」はどのような場面で使うと適切になるかを問うたところ、知識が与えられる場合、例えば「日本語を教えてくれた」や「何か物の作り方や重要な情報を教えてくれた」であれば、「てくれる」を使ってもいいとの答えであった。その答えに対し、レストランの情報も一つの知識になるのではないかと質問すると、それはあまり重要ではない情報で、知識とは異なるとの答えが返ってきた。自身が望んで得たわけではない事柄は「情報」であり、自身が欲して獲得した事柄は「知識」と区別していると考えられる。それゆえ、このような考えをもつ被験者は、以下の問題 22 で授受補助動詞の「てくれる」が最も適切だと回答している。

問題 22：【あなたは兄に数学を教えてほしいと頼みました】

あなた：兄ははじめは、いやがっていたけれど、ていねいに（ ）。

〈a 教えた／b 教えてくれた／c 教えてもらった／d 教えてあげた〉

母語話者の回答率： a 0%, b 97.67%, c 2.33%, d 4.65%

学習者の回答率： a 61.33%, b 80.66%, c 68%, d 32.66%

一方、もし相手が兄でなく、先生の場合ではどれを選択するかを当該の被験者達に確認したところ、問題 9 では「教えた」の他、「教えていた」あるいは「おっしゃった」や「おっしゃっていた」を、問題 22 では敬語の授受補助動詞を使った「教えてくださいました」や「教えていただきました」を使用すると答えた。相手が先生の場合でも、敬語を用いる点を除き、授受補助動詞を使用するかしないかに関する学習者の判断は変わらない。

恩恵性が関わる授受補助動詞の使用に関して、藤原他（2009）は次のように述べている。

(3) *先生が私の作文を直しました。〔藤原他（2009）〕

例 (3) では、「直しました」を使用することで事実を正確に表すことはできるが、その事実に対して感謝の気持ち・恩恵を感じていることを表しておらず、不自然な文となる。そのため、「直してくれました」または「直しててくださいました」と「てくれる」を使用しなければならないと説明されている。例 (3) や調査問題 22 では、学習者も恩恵を感じることができるのに対して、調査問題 9 では学習者は恩恵を感じにくい。藤原他（2009）の主張によると、母語話者は問題 9 でも問題 22 でも恩恵や感謝を感じていることになる。しかしながら、授受表現は常に恩恵性のみを表すわけではない。問題 9 や問題 22 において、授受補助動詞は話者が文中でどの参与者となっているか、つまり、動作主なのか、それとも、受け手

なのかを示すためにも利用されている。例えば、先の問題9の文の後半を(4)のように、話者にとって好ましくない状況に言い換え、兄に対して恩恵を感じにくい文に変えても、授受補助動詞が必要であり、「教えた」のみでは不自然である。

(4) きのう、お兄さんが安くておいしいと(?教えた／教えてくれた) レストランはとてもまずかったよ。

上の(4)で授受補助動詞のない「教えた」を使った場合、動作の受け手が話者以外の人物だと解釈されてしまう。つまり、ここの授受補助動詞は恩恵があることを積極的に伝えるというよりも、話者が主語(動作主)ではなく、目的語(動作の受け手)であることを示すために用いられている。問題9の元の文においても類似の事情が背景にある。動作の受け手が他の人ではなく、話者であることを伝えるためには、授受補助動詞を使う必要がある。

5.2 状況に合わないという誤解

次の問題18は、学習者には恩恵を感じられない状況の文であると同時に、授受補助動詞の使用に対して学習者がどのような印象を抱いているかを示している。

問題18:【あなたは、弟とけんかをしました。あなたはとても怒っているので、
もう弟の顔を見たくありません。】

あなた: 今すぐ自分の部屋に()か。

〈a 戻れない／b 戻ってくれられない／c 戻ってもらえない／d 戻ってあげられない〉

母語話者の回答率: a 6.98%, b 4.65%, c 93.02%, d 0%

学習者の回答率: a 82%, b 46%, c 38.66%, d 36%

「a 戻れない」が最も適切あるいは適切で、「c 戻ってもらえない」が不適切だと選択した被験者82名のうち42名にフォローアップインタビューを行った。被験者の考えを総括すると、「てもらえないか」は丁寧に依頼している感じがするため、この文の状況と合わないとのことである。この問題18では、話者が弟と喧嘩し、怒っている状況であって、弟の顔を見たくないという場面での発話である。多くの日本語母語話者にとっては、弟が自分の部屋に戻って、自身が弟の顔を見なくてよくなることは、自身にとって利益となると捉え、授受補助動詞の使用に繋がっているが、多くのカンボジア人被験者にとってはそうではないようである。つまり、弟が自分の部屋に戻るだけでは、話者に利益をもたらすとは考えられないため、授受補助動詞を使用するのは不適切だと判断している。どのような状況や場面であれば、授受補助動詞の使用が適切だと思うかを尋ねたところ、話者が静かで一人にいたい状況や、恋人が家に遊びに来ていて、恋人と二人きりでいたい状況を例に挙げた。喧嘩の

場面ではなく、このような場面であれば、「戻ってもらえないか」を使って懇願するのに相応しいとの答えであった。なお、授受補助動詞を使用する選択肢の中で「b 戻ってくれられない」を（最も）適切だと判断した学習者が最も多かった。「戻ってくれられない」という形式はそもそも文法的に誤りであるにもかかわらず、それを選んだ学習者が多いことは、形式についてのさらなる指導の必要性も示唆する。

5.3 恩着せがましい表現を回避しようとする過剰な傾向

次に、学習者が恩恵を感じず、授受補助動詞を使用すると、恩着せがましいと考えている場面を見てみたい。

問題 5：妹はまだ文字が読めないので、絵本を（ ）。

〈a 読んだ／b 読んでくれた／c 読んでもらった／d 読んであげた〉

母語話者の回答率： a 0%, b 0%, c 16.28%, d 90.70%

学習者の回答率： a 62%, b 43.33%, c 48%, d 54.66%

授受補助動詞の無使用が最も適切あるいは適切で、授受補助動詞の「てあげる」が不適切だと選択した被験者 52 名のうち、上記の問題 18 でインタビューを行った 42 名にフォローアップインタビューを行った。被験者の考えを総括すると、妹は本当に絵本を読んでもほしいかどうか分からず、話者の思い込みで読んだ可能性が高いとの意見であった。もし妹が読んでもほしいと言っている状況なら、「読んだ」も「読んであげる」も適切だと被験者は考えていた。しかし、発話の背景が定かでなく、「読んであげる」を使うと、とても恩着せがましい文になると習ったため、使うのを避けたと述べていた。また、「絵本を読んだ」に加え、選択肢に存在しないが、「絵本を読んで聞かせた」という使役構文も適切だと答えた被験者もいた。つまり、話者の意思の有無によって、恩恵を示す文にするかどうかを判断しているように思われる。それゆえ、それらの被験者は、以下の問題 8 と問題 12 についても、授受補助動詞の無使用の「聞いた」と「案内する」が最も適切で、授受補助動詞「てあげる」の「聞いてあげた」と「案内してあげる」が不適切だと判断している。

問題 8：ないている子供の話をゆっくり（ ）。

〈a 聞いた／b 聞いてくれた／c 聞いてもらった／d 聞いてあげた〉

母語話者の回答率： a 55.81%, b 4.65%, c 2.33%, d 93.02%

学習者の回答率： a 83.33%, b 40.66%, c 50%, d 38%

問題 12：【遠くに住んでいる友人が、あなたが住んでいるところに遊びに来ます。】
あなた：せっかくだから、有名なところを（ ）よ。

〈a 案内する／b 案内してくれる／c 案内してもらおう／d 案内してあげる〉

母語話者の回答率：a 74.42%, b 0%, c 0%, d 83.72%

学習者の回答率：a 81.33%, b 40%, c 31.33%, d 73.33%

5.4 授受表現は恩恵性のみを表すという誤解

次の問題は、母語話者への調査の結果によると、条件節に授受補助動詞「てくれる」が現れる必要があるが、76%の学習者が無使用を選択し、「非用」となるものである。

問題 13：【あなたは疲れている母と話します。】

母：買い物に行きたいけれど、つかれたわ。

あなた：ほしいものを（ ）代わりに行ってあげるよ。

〈a 教えれば／b 教えてくれれば／c 教えてもらえれば／d 教えてあげれば〉

母語話者の回答率：a 0%, b 90.70%, c 51.16%, d 2.33%

学習者の回答率：a 76%, b 66.66%, c 55.33%, d 32.66%

この条件節の文において、授受補助動詞の無使用が最も適切あるいは適切で、「教えてくれれば」あるいは「教えてもらえれば」が不適切だと選択した被験者 42 名にフォローアップインタビューを行った。この場面では、話者にとって全く利益・恩恵とならないため、授受補助動詞の使用は不適切だと言う被験者が多かった。話者が母の代わりに買い物に行くのだから、母が自分のほしいものを教えるのが当たり前であり、逆に話者が母に恩恵を与えている。文末の「行ってあげる」はそれを反映しており、文中にも授受補助動詞を使用すると、話者と母が互いに恩恵を与え合っているような文になってしまう。しかし、ここでは、話者から母へ恩恵が与えられるとしか捉えられないため、話者の行為について恩恵を受け取るという授受補助動詞を付加してはいけないという考えが学習者にある。

本章の考察から、カンボジア人日本語学習者は所与の状況における恩恵の程度のみを考慮して授受補助動詞を使用すべきかどうかを判断していることが分かった。また、恩着せがましい表現を回避するために無使用の方が適切だと判断することもあった。さらに、学習者が考える授受表現の恩恵性は、母語話者よりも状況や場面に左右される程度が大きいことが明らかとなった。張（2019）は、「恩恵」という言葉が日本語と中国語で異なる意味があるにもかかわらず、教師がこの漢語を使用して説明したり、多くの研究者がそのまま引用したりするせいで、学習者が日本語の授受表現を正確に使用できず、授受補助動詞の無使用を選択し、「非用」になってしまうと述べている。日本語の「恩恵」とそれに対応するカンボジア語の *kun* も全く同じ意味ではなく、何らかの差異がある可能性がある。学習者は授受表現は、恩恵や感謝のみを表現するという考え方を持つ傾向が強いため、「恩恵」というものの捉え方の違いも授受表現の適切な使用をさらに左右する要因となり得る。

張（2019）は中国語母語話者の恩恵に対する意識調査を行い、感謝の気持ちを持った時に授受表現を使うと教えれば、学習者の理解が進むかもしれないと述べている。しかし、先の（4）や問題 13 が示すように、授受表現の使用場面は感謝の気持ちを表す時のみではないため、張（2019）の提案だけでは授受表現への理解を促すには十分でない。授受補助動詞が常に恩恵・感謝のみを表すわけではなく、話者が動作の行為者や受け手とどのような関係にあるかという観点の重要性を学習者に理解させることも不可欠である。

6 おわりに

本稿では、アンケート調査とフォローアップインタビューを通して、カンボジア人日本語学習者における授受補助動詞の「非用」に現れる恩恵意識について考察した。まず、アンケート調査から「非用」の出現率が高いことが分かった。日本語母語話者にとって授受補助動詞の無使用が不自然になる問題文において平均 64.88%の学習者が無使用を（最も）適切と判断し、「非用」となっている。授受補助動詞の使用が不適切で、無使用の方が適切だと判断した被験者に対するフォローアップインタビューでは、大半が恩恵や感謝を感じにくいことを理由に挙げ、なぜ恩恵や感謝を感じにくいかを詳しく追求したところ、カンボジア人日本語学習者が日本語母語話者と異なる恩恵意識を持っていることが浮き彫りになった。また、2 年よりも 3 年生（中級）以降の学習者のほうが「非用」の出現率が高いことは、学習が進むと、日本語母語話者に比べて恩恵性を過大に捉える傾向がさらに強くなっていることを示す興味深い結果も得られた。さらに、授受補助動詞の使用・無使用が文中における参与者としての話者の位置づけを示す役割も担うことがあるにもかかわらず、多くの学習者にはその知識が欠けており、授受補助動詞は専ら恩恵や感謝を表すという学習者の誤解がその適切な使用を阻害する要因となっていることも明らかとなった。

カンボジア人日本語学習者が授受補助動詞を適切に使用できるようにするには、恩恵（の程度）の認識に関する日本語母語話者との差や授受補助動詞が有する恩恵性以外の機能についても理解を深めさせることが肝要である。そのためには、授受動詞の語彙形式間の選択にのみ焦点を当てるのではなく、学習者用教材に「非用」に関する情報を積極的に取り入れることが有益である。初級から中上級段階にかけて日本語の授受表現を教育する際、「非用」の情報をどのように織り交ぜると、学習者の恩恵意識を過大にさせない効果を得ることができるのか、また、カンボジア語からの負の転移と非用にどのような関係があるのかは今後の課題としたい。

参考文献

- 王燕（2000）「授受表現における『非用』について—中国語を母語とする日本語学習者の場面—」．「日本語教育学会秋季大会」名古屋外国語大学，pp.49-54.
- 太田陽子（2020）「授受表現の教育上の問題点：学習者は授受表現の運用のどこに困難を覚

- えるのか』、『一橋大学国際教育交流センター紀要』Vol.2, pp.5-16.
- 周キン茹(2019)「中国人日本語学習者の授受補助動詞の『非用』『過剰使用』に関する研究—学習環境が与える影響について」、『言語文化と日本語教育』Vol.54, pp.29-32. お茶の水女子大学日本言語文化学会.
- 孫成志(2013)『『〜テクレル』と『テモラウ』系の授受補助動詞の使用と習得—JFL 環境における中国人学習者を対象に』、『日本語／日本教育研究』4, pp.57-73. ココ出版.
- 張卉娟(2017)「学習環境が『てくれる』の『非用』に与える影響について：中国語母語話者を対象として」、『日本語研究』37, pp.1-14. 首都大学東京・東京都立大学日本語・日本語教育研究会.
- 張敬唯(2019)「中国における日本語授受表現教育の問題点について」、『創価大学大学院紀要』, 第39集, pp.137-153.
- 中崎温子(2002)『『無生主語+〜てくれる』文の『非用』の考察』、『2000年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, pp.129-134.
- 藤原安佐、阿部仁美、大井裕子、椿原博子、吉田則子(2009)「日本語教育における配慮に関わる表現の指導」、『北海道大学大学院教育学研究院紀要』108, pp.85-98.
- 堀口純子(1983)「授受表現にかかわる誤りの分析」、『日本語教育』52号, pp.91-103. 筑波大学.
- 李文博(2021)「中国人日本語学習者の授受表現の習得状況に関する一考察—『コメントカード』から抽出した文に基づいて—」、『鳴門教育大学国際教育協力研究』Vol.15, pp.69-74.
- 梁穎穎(2019a)「中国人学習者における授受表現の非用実態の調査報告」、『日本語教育方法研究会誌』Vol.25, No.2, pp.6-7.
- 梁穎穎(2019b)「中国人学習者における授受表現の非用実態の調査報告(2)—『てくれる』と『てもらう』を中心に—」、『日本語教育方法研究会誌』Vol.26, No.1, pp.6-7.
- 吉永尚(2012)「テ形節における統語的考察」、『園田学園女子大学論文集』Vol.46, pp.113-123.

ⁱ 学習者用の予備調査として、日本人と同じ問題と方法で調査を行った。しかし、39名の協力を得たものの、問題数が多く、途中で諦めた学生も多数いたため、収集したデータも正確さに欠ける可能性があった。本稿で考察した本調査では、日本語母語話者への予備調査の結果を踏まえて問題を厳選し、所要時間や学生への負担を軽減する工夫を施した。

ⁱⁱ 今回のフォローアップインタビューは、母語話者と異なる回答をした被験者のみに行った。母語話者と同じ回答をした被験者の傾向については今後の課題とする。

ⁱⁱⁱ 「継起節」はテ形接続で最も典型的なもので、テ形節の事態が完了した後に主節事態が生じるという時間的前後関係にある複数の事態をテで繋いだものを指す(cf. 吉永2012)。

^{iv} 母語話者に対する調査で用いた(ダミーを除く)42問のうち、複数の授受補助動詞が適切だと母語話者が判断したものなど、学習者用のアンケートの目的に照らし合わせて不適格だと判明したものが4問あった。